

間に行なうことが適当と考えられる。また高温乾燥時にいもの肥大が行なわれるので敷わらなどによる乾燥防止も重大なことと考えられる。なお、催芽することにより慣行栽培より早く収穫されるので稲刈前に収穫できるこ

と、市場価格の高い時期に出荷できるなどの有利な点があり、また、台風による被害も軽減されるばかりでなく、後作の可能性も生じてくる。催芽期間については検討中である。

## ほうれん草の除草剤利用に関する試験

佐藤 三郎・木村 穎治・斉藤 利男

(福島県園試)

### 1 ま え が き

最近の除草剤は、一般に殺草効果は大きく、また、作物によっては受ける薬害が大きいものがあると云われている。本試験においては2つの新しい除草剤、H 634、ロロックスをとりあげた。H 634はあかざ科(ほうれん草、ふだん草、ビート等)に、また、ロロックスは人参に、それぞれ、有効であると云われるが、ほうれん草について、殺草力、作物に対する選択性について検討したので報告する。

### 2 試 験 方 法

#### 1 試験区名および区制

H 634\* 150g (10アール当り、製品量) 区

H 634 200g 区

ロロックス\*\* 100g

〃 150g

カーメックス 70g

〃 100g

無処理 〃

※ 3-キシロヘキシル-5, 6-トリメチレン-ウラシル

※※ 3-(3,4-ジクロロフェニル)-1-メトキシ-1-メチル尿素

1プロット 5.6m<sup>2</sup> 3連制

#### 2. 供試品種名、播種時期、播種量

次郎丸, 10月1日, 1プロット15g (約 1,050粒)

#### 3. 栽植距離

畦間 1m, まき幅 15cm

#### 4. 施肥量

化成肥料 (16:10:14)

10アール当り 125kg

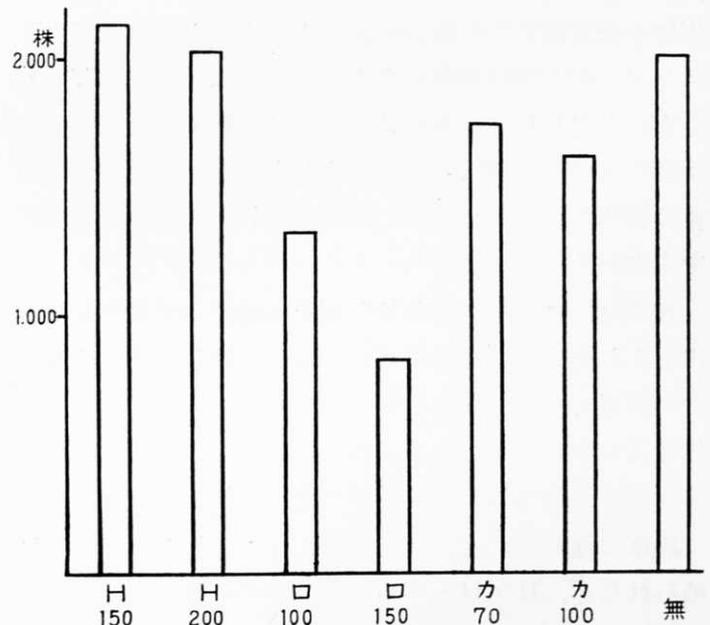
#### 5. 除草剤処理時期および方法

播種, 覆土後, 噴霧機で全面に散布,

処理後, 5日間の雨量は 5.8mm

### 3 結果および考察

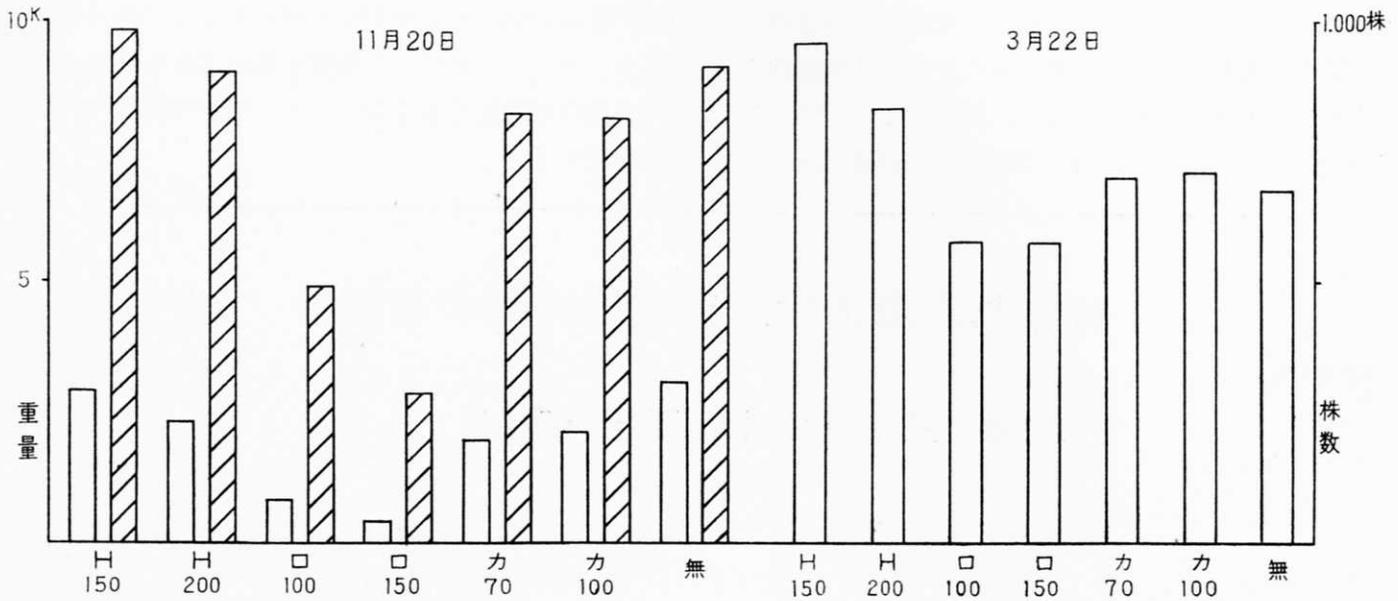
播種後27日目に、作物に与へる除草剤の影響を知るために、発芽数の調査を行なった。第1図に示すとおりH



第1図 発芽数調査

634では 150g・200g区ともほとんど影響はなかったが、ロロックスは 100g区でも、かなりの発芽率の低下が見られた。カーメックスも同じような傾向があったが、ロロックスほどではなかった。

収量調査は1プロットを半分ずつ、第2図のとおり、11月20日と翌年3月22日の2回にわけて行なったが、11月20日の結果では、株数・重量とも、10月28日の発芽数調査と同じような結果で、H 634の 150g区は無処理区



第2図 収量調査3プロット合計値(8.4m<sup>2</sup>) 斜線部は株数を示す

と差はなく、200g区ではやや劣った。

ロロックスは100g・150g区とも著しく悪く、カーメックスも無処理区と比べるとかなり悪かった。

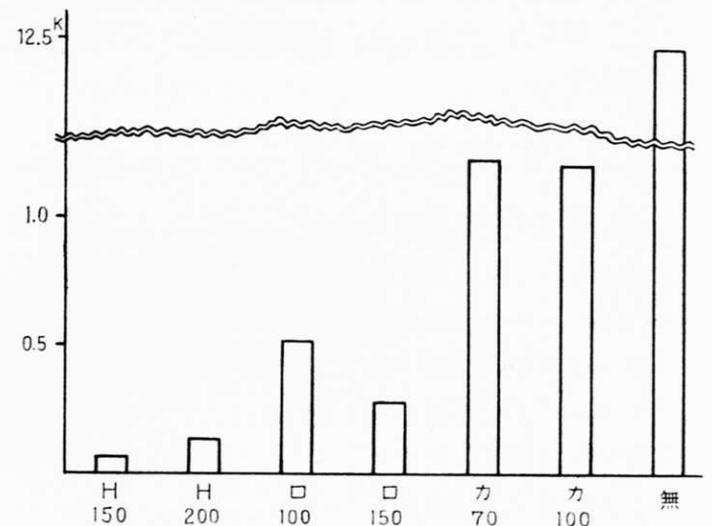
3月22日の結果では、H 634が最も良く、次いでカーメックス・無処理・ロロックスの順で、前回の結果とは大分異なった。ロロックスは、発芽時の葉害が最後まで影響をおよぼした。無処理区は生育中途までは最も良かったが、その後の雑草の発生とともに、生育が抑制されたものと思われる。カーメックスは無処理区とは逆に、生育中途までは葉害のためあまり良くなかったが、その後の雑草の発生が少なかったため最終的には、無処理区を上廻る結果となった。

雑草は、11月20日の収量調査時には、いずれの区にもほとんど発生していなかった。第3図のとおり、3月22日の調査では、H 634・ロロックス・カーメックス・無処理区の順に多かったが、H 634・ロロックスは、カーメックスと比べると特に殺草効果は著しかった。

雑草の種類別には、第1表のとおり8種類について認められたが、H 634・ロロックスについては、かなり広

範囲の雑草に効果を持つようであった。ただし、H 634については、あかざには効果がないことが予想されるが、本試験においては、あかざの発生を見なかったためその点は明らかでない。

以上の点から、H 634およびロロックスは従来の除草



第3図 雑草量調査3月22日3プロット合計値(16.8m<sup>2</sup>)

第1表 雑草の種類別調査3月22日(5.6m<sup>2</sup>当り重量単位g)

区別	種類別	ミミナグサ		イヌノフリ		ハコベ		ノボロギク		スズメノカタビラ		タネツケナ		キクムグ		ナズナ		計	
		本数	重量	本数	重量	本数	重量	本数	重量	本数	重量	本数	重量	本数	重量	本数	重量	本数	重量
H 634	150g区	2	6							1	2					1	2	4	10
〃	200g区	17	42	3	4											1	8	23	54
ロロックス	100g区	147	116	2	42	13	58	4	14	3	4		3	4	1	4	183	242	
〃	150g区	37	54	1	4	2	10	2	6	4	6							46	80
カーメックス	70g区	116	264	4	22	19	176	5	44	8	6							152	512
〃	100g区	111	116	27	132	17	148	3	18				3	3				151	422
無	処理区	6,812	3,360	148	600	76	432	24	176	20	16	44	48					7,124	4,632

剤より殺草効果は大きい、作物に対してはかなり選択的、ほうれん草の播種後処理では、H 634がきわめて

有望であることが確かめられた。

## 露地メロンの生産安定に関する試験

——トンネル栽培様式と整枝及び施肥量と方法——

椎名徳夫・若松幸夫・梅本俊成・萩生田邦雄

(山形県農試砂丘分場)

### 1 ま え が き

山形県日本海沿岸砂丘地では、古くから露地メロンの栽培が行なわれてきたことは周知のとおりである。以前は米国露地メロン品種をそのまま栽培していたが、戦後当地において品種の育成を続け、温室用種とキャンタロープーの一代交配種である新品種の誕生をみた。昭和35年に山形県露地メロン栽培組合ができ、露地でのマスクメロン生産がなされ、地場での販売と県外への出荷が行なわれているが、実際農家の生産場面においてはまだ多くの問題が残されている。最大の問題は甘味の揃いと生産の安定化である。販売される果実の全てはB x ° 12以上であることがまず目標で、なんとといってもこれの解決が先決であり、またこれと同時に、常に各人の畑での生産が安定することが望まれる。これらの目標に向い、当地においては当初よりその解決のため諸試験を続けてきたが、ここではトンネル栽培様式と整枝及び施肥の点について検討した結果を報告する。

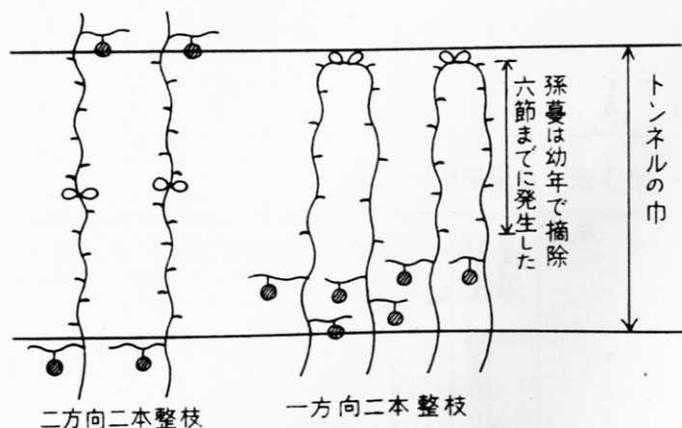
### 2 トンネル栽培様式と整枝

例年7月中・下旬以降の高温と乾燥は、露地メロンの生育及び果実の成熟には不適であるため、以前の試験結果から生育時期を前に移動させ高温乾燥期をさけるトンネル栽培の実施が品質の安定上有利であることが明らかにされたので、トンネル幌栽培が奨励されてきた。しかしこの幌栽培の方法も品質の向上安定と、生産安定については改善することがあると考え、主として下記試験区の間で、トンネル幌の形、茎葉の伸長位置、株間及び着果数の関係などを検討した。

#### 1. 材料及び方法

昭和39年当砂丘分場において、供試品種にライフを用い試験区を次のようにした。

- (1) ビニール慣行幌2方向, 2本整枝, 1枝1果
  - (2) ビニネット慣行幌2方向, 2本整枝, 1枝1果
  - (3) ビニネット慣行幌1方向, 2本整枝, 1枝1果
  - (4) ビニネット平幌1方向, 2本整枝, 1枝1果
  - (5) ビニネット平幌裾寒冷紗1方向, 2本整枝, 1枝1果
  - (6) ビニネット平幌1方向, 2本整枝, 1枝1果, 株間50cm
  - (7) ビニネット平幌1方向, 2本整枝, 1枝2果
  - (8) ビニネット平幌1方向, 2本整枝, 1枝2果, 株間50cm
- 温床播種3月25日, 育苗日数35日, 4月30日に圃場定植とした。株元には70cm巾のポリマルチを行ない、畦巾2mの平畦で試験区別6及び8以外は60cmの株間とした。1区14m<sup>2</sup>の11株植の単区制で行ない、調査個体は各試験区別で目的の着果数を得たものだけとした。施肥量は10アール換算で元肥に堆肥 1.5ton, 消石灰 150kg, 磷加苦土安 150kgを施し、追肥として6月20日に硫安 20kg, 塩加10kgを畦上に施した。整枝要領は温床育苗時に親蔓3葉残して摘芯し、子蔓2本だけ伸長させ子蔓から発生する孫蔓は、6節以下を発生初期に除いてその後は



第1図 整枝図

放任とした。子蔓の7節以上に残された孫蔓の第1節に人工交配により着果させた。なおトンネル幌の巾は慣行